平安時代から鎌倉時代にかけての格助詞「へ」の変容

佐　川　郁　子

要　旨

平安時代から鎌倉時代を対象とし、格助詞「へ」の機能拡張を描出した上で、その変化の様相を考察した。分析対象は、「へ」の前節要素および係る動詞とし、「物理性」により分類がなされた。結果として、「具体から抽象への拡張」が、これまで指摘されてきた係る動詞に関してだけではなく前接要素に関しても明示された。

【キーワード：日本語／格助詞／方向格／「へ」】

1. はじめに

格助詞「へ」は、主として移動動詞を伴い〈方向〉を表すと考えられている（1）。

（1）東へ行くというのは、幕府打倒を意味しているのだろうか。　〈方向〉
（『高杉晋作』2000）

このような典型的な〈方向〉を表す機能以外にも、〈着点〉〈目的〉〈受領者〉などを表す機能を有していると考えられる（cf. 小林 1992）。実際に小説などに現れる用例を以下の（2- 4）に示した。

（2）道場へ着くなり、喜鬼の手を取り喜んだ。　〈着点〉
（『剣豪一刀斎』2005）

（3）食事へ行きましょう。　〈目的〉
（『医者と結婚する方法』2002）

（4）このアジサイを誰かよその人へ上げたことはありませんか？　〈受領者〉
（『アジサイになった男』1997）

方言地理学を利用し「へ」の変遷を考察した小林（1992）や、通言語的な「方向格」の機能拡張を調査した Rice & Kabata（2007）を鑑みると、これら「へ」の機能は時代を経るにしたがって、〈方向〉〈着点〉〈目的〉〈受領者〉へと次第に拡張していったと考えられる。では、この機能拡張の内実はどのようになっているだろうか。本稿では、平安時代から鎌倉時代を対象とし、その変容について考察する。変容を記述することは、機能拡張のメカニズムを究明することにつながるという点で有意義である。なお、ここでは「機能拡張」を、「機能語の使用される文脈が広がること」と定義する。

２. 先行研究

格助詞「へ」の変遷についてのまとまった記述は石垣（1943）がはじめである。石垣は奈良時代から現代までの「へ」の変遷を係る動詞を観察することにより描出し、「へ」が具体的な接着性を捨象し概念的な方向性を抽象したと結論付けた。また、杉井（1954）は、「へ」の格助詞としての成立について調査し、奈良時代から平安時代にかけて成立したと述べた。さらに、青木（1956）は、平安時代から室町時代の文献を調査対象とし、「へ」が移動性動作の目標を表す場合において、〈言語主体の心理的中心から遠ざかってゆく〉意味のみを表す点で格助詞「ニ」と異なるとした。

このように、先行研究においては、おおむね奈良時代から現代にかけての機能が描出されているといえる。しかしながら、これらの研究においては機能拡張の過程の詳細な変遷が描かれていない。つまり、石垣（1943）および 青木（1956）では、係る動詞の分類は比較的詳細に行われているが、前節要素の分類が不十分であるといえる。

したがって、本稿では日本語の格助詞「へ」が平安時代から鎌倉時代にかけてどのような変化をたどったのかを前節要素および係る動詞に着目し、より詳細に分析し変化の様相を考察することを目的とする。

３. 研究方法

平安時代および鎌倉時代を代表する文学作品より格助詞「へ」が現れる用例を収集し、分析する。平安時代の作品として『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『源氏物語』を、鎌倉時代の作品として『宇治拾遺物語』『平家物語』を選出した。これらの作品から格助詞「へ」が使われている用例を収集し、前接要素と係る動詞から「へ」の機能を分析する。

４. 分析

対象作品から抽出された「へ」の用例は、平安時代が136例、鎌倉時代が1417例である（表１，２）。作品ごとの用例数は以下の通りである。ただし本稿では、分析数を調整するために､1165例ある『平家物語』からの用例のうち224例を分析対象とした。したがって、鎌倉時代の用例1147のうち分析対象となるのは、476例である。分析対象の選出方法としては、『宇治拾遺物語』の用例数（252例）に近いものとなるように、巻一から巻三までを対象とし抽出するというかたちをとった。

表１　平安時代の用例数

作品	用例数
竹取物語	14
伊勢物語	19
土佐日記	11
源氏物語	92
合　計	136

表２　鎌倉時代の用例数

作品	用例数
宇治拾遺物語	252
平家物語	1165 （内224を分析）
合計	1147 （内476を分析）

4．1 前接要素

まず、「へ」に前接する要素は名詞相当語句であるが、本稿ではこれを「物理性」を基準に分類する。

物理性は、「物理的」と「非物理的」の二極をもつ。物理的なもの、つまり物理性が高いものは、実際に触れられるものであり、反対に非物理的なもの、つまり物理性が低いものは、実際には触れられないものである。例えば、「リンゴ」は実際に触れることができるので物理的であるといえる。そして、「アイディア」は触れることができないので非物理的である。

物理性に関しては、「空」などの「目には見えるが触れることが難しいもの」、「声」などの「聞こえるが目には見えないもの」といったより細かい分類が考えられるが、本稿では、触れられるか否かを基準に「物理的」「非物理的」の二つに分類する。したがって、「空」「声」は触れることができないので非物理的なものとする。

実際の用例によって再度分類を確認したい（5，6）。

（5）物理的なもの

a. … けふなん　天竺へ　石の　はち　とりに　まかる　（『竹取物語』）

b. … 山へ　行ぬ　（『宇治拾遺物語』）

（6）非物理的なもの

a. … 西へ　はしる　（『宇治拾遺物語』）

b. … しりへ　しぞきに　しぞきて …　（『土佐日記』）

（5）にある「天竺」は現在のインドのことである。「天竺」や「山」は実際に触れることができる場所であるので物理的なものである。反対に、（6）に示されるような「西」や〈後ろ〉を意味する「しり」は触れることができない概念であるので非物理的なものとなる。このような分類基準にしたがって前接要素を分類した結果が以下である（表3，4）。

表3　平安時代における前接要素

作品	物理的	非物理的	合計
竹取物語	10	4	14
伊勢物語	19	0	19
土佐日記	9	2	11
源氏物語	88	4	92
合計（割合）	126（93%）	10（7%）	136（100%）

表４　鎌倉時代における前接要素

作品	物理的	非物理的	合計
宇治拾遺物語	213	39	252
平家物語	191	33	224
合計（割合）	404（85%）	72（15%）	476（100%）

物理的な前接要素の割合は、平安時代では93%、鎌倉時代では85% であり、両時代において高い値を示している。平安時代から鎌倉時代への変化を見ると物理的なものを表す割合が93% から85% へと減少し、相対的に非物理的なものを表す割合が増加したといえる。

４．２ 係る動詞

次に、「へ」に係る動詞について見ていく。典型的な「へ」は移動動詞と共起し、移動する方向を示す。本稿では、この移動の物理性に着目して分類基準を設けた。

「行く」などの動詞は、中心的な意味として移動の意味をもっており、すなわち〈経路〉があると考えられる。さらに、これらの動詞は、動作主の物理的な移動を表すので、物理性が高いと理解される（表５、I. 動作主の移動）。「I」として「往ぬ」「赴く」「下る」などが分類される。

他方、「急ぐ」や「入る」といった動詞は、中心的な意味として動作の〈様態〉を表していると考えられる。動作の結果として動作主が移動するので、〈経路〉を含んでいるといえる。ただし、中心的意味が〈様態〉であり、〈経路〉は、「I. 動作主の移動」に比べて具体性すなわち物理性が低いと考えられる（IIa. 動作主の動作の結果の移動）。「IIa」には「走る」「逃ぐ」「飛び越ゆ」などが分類される。

また、「送る」「遣はす」などは、動作主の働きかけによって動作主以外の人物や物体が移動することで〈経路〉として理解される（IIb. 動作主の働きかけによる動作主以外の物体の移動）。「IIb」には「召す」「引き寄せる」「流す」などがある。

加えて、「申す」や「訴ふ」などの動詞は、物理的な物体の移動を必ずしも伴わないが、音声や情報などが移動すると考えられ、比喩的に経路が写像されていると理解することができる（III. 比喩的な移動）。物理的な物体の移動を伴わないため、これらはより非物理的すなわち、より抽象的なものであると考えられる。最後に、移動を伴わない動詞と考えられる「なす」や「ある」の例が見られたが、移動がないということはつまり経路がないと理解される（IV. 移動なし）。「III」としては、「伝う」などを分類した。

これらの分類の移動を含むもので、最も物理性が高いのが「I」の動作種の移動であり、最も物理性が低いのが「III」の比喩的な移動である。

表５　平安時代および鎌倉時代における係る動詞の〈経路〉に関わる分類

分類基準	平安時代		鎌倉時代	
	動詞の種類	用例数（出現率）	動詞の種類	用例数（出現率）
I. 動作主の移動	13	79（58%）	37	211（44%）
IIa. 動作主の動作の結果としての移動	19	37（27%）	53	144（30%）
IIb. 動作主の働きかけによる動作主以外の物体の移動	6	7（5%）	36	78（16%）
III. 比喩的な移動	3	3（2%）	11	20（4%）
IV. 移動なし	1	1（1%）	6	12（3%）
V. 動詞の省略	1	9（7%）	1	11（2%）
合計	43	136（100%）	144	476（100%）

表５を見ると、平安時代および鎌倉時代において、共に物理性の高い移動である「I」の用例がもっとも多く、物理性の低い比喩的な移動である「III」、そして移動のない「IV」へと出現率が下がっている。平安時代から鎌倉時代にかけての変化を見ると、「I」の〈経路〉は、58% から 44% へと減少傾向を示していることがうかがえる（太線部）。そして、「IIa」に関しては、平安時代の 27% から鎌倉時代の 30% へという増加がみられる（波線部）。さらに、「IIb」および「III」に関しても、それぞれ５% から16% へ、２% から４% への増加傾向をしめしていると読み取れる。これらの変化は微妙ではあるものの、物理的な〈経路〉を表す動詞から非物理的な〈経路〉を表す動詞への拡張が垣間見られる。また、移動のない「IV」についても、１% から３% への増加傾向があるといえる。

総じて、「へ」に前節する要素および係る動詞は、平安時代から鎌倉時代にかけて、共に物理的から非物理的なものへと拡張しているということがいえる。

５. 考察

表５を見ると、「へ」と共起できる動詞の種類が、43から144へと増加していることが分かる。ただし、両者の用例数に対する動詞の種類の割合を算出するとどちらも３割程度となっている。つまり、平安時代全体の用例数が少ないために出現できる動詞の種類が限られていると捉えられる。しかしながら、例えば『源氏物語』の作品全体の長さは、鎌倉時代の『宇治拾遺物語』や『平家物語』に比べても多く、もしも平安時代の「へ」の汎用性が高ければ、用例数や動詞の種類の多さとして反映されることは十分にあり得る。平安時代の文学作品である『源氏物語』における作品全体の分量に対して用例数や動詞の種類が少ないということは、つまり、鎌倉時代に見られる用例数の増加および動詞のタイプの増加は明らかに「へ」の機能拡張を示している。

係る動詞の具体から抽象へという変化は、石垣（1943）や青木（1956）によって指摘されるところであるが、本稿では物理性という観点を用いて分類し、これまで明確には示されていなかった前接要素の具体から抽象へという変化を提示した。

6. おわりに

本稿では、平安時代から鎌倉時代にかけての格助詞「へ」の変容を考察した。前接要素および係る動詞を物理性によって分類した。結果として、平安時代から鎌倉時代にかけて、どちらの分類においても具体的なものからより抽象的なものを表す割合が増加する傾向にあることが示された。また、「へ」と共起可能な語のタイプが増加し、つまりは、「へ」の機能が拡張したことが示された。

参考文献

Rice, Sally, & Kabata, Kaori.（2007）. Crosslinguistic grammaticalization patterns of the ALLATIVE. *Linguistic Typology*, 11（３）, 451–514.

青木伶子（1956）「『へ』と『に』の消長」『国語学』（24）, 107–120.

石垣謙二（1943）「助詞『へ』の通時的考察」『文学』11（10）, 29–43.

小林隆（1992）「『へ』の消長についての方言地理学的一考察」『日本語学』11（６）, 142–161.

杉井鈴子（1954）「助詞『へ』の成立」『国語学』（19）, 42–54

調査資料

「竹取物語」上坂信男（1980）『九本対照竹取翁物語語彙索引　索引編　笠間索引叢刊75』笠間書院

「伊勢物語」西端幸雄 他（編）（1994）『歌物語　総合語彙索引』勉誠社

「土佐日記」日本大学文理学部国文学研究室（1967）『土佐日記総索引』日本大学文理学部人文科学研究所

「源氏物語」上田英代 他（編）（1996）『源氏物語語彙用例総索引』勉誠社

「宇治拾遺物語」境田四郎（監）（1975）『宇治拾遺物語総索引』清文堂

「平家物語」近藤政美 他（編）（1998）『平家物語高野本語彙用例総索引　付属語　下　助詞（二）』勉誠社